
麒麟が燃えている

シャロク坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリンが燃えている

【Nコード】

N1495P

【作者名】

シャロク坊主

【あらすじ】

不幸でもないのに生きづらい自分に罪悪感を感じる少年、伊吹^{いぶき}有也^{ゆい}は、ある放課後、赤信号で突っ込んできたトラックにぶつかるのと同じぐらいのありえなさで、虚構を司る【詩人】に出会う。彼から【燃えるキリン】を授かったのだが、いったいこんなものどうしろと言っのか。少しずつ、時計の針は進んでいく。

すべての繊細な人へ。あるいは虚構を愛する人へ。

1 虚構との遭遇

1

「どうしてこんなに辛い思いをしなくちゃ……」

そう呟きかけて、伊吹有也いぶきあやは口をつぐんだ。

弱音を吐く資格は誰にあるのだろう。今にも死にかけている病人、お腹が一杯になるという感覚を知らない痩せた子供、多くの借金を背負った人。ある日突然、人生の意味のなさに気付いて立ち尽くしてしまった頑張り屋。まあ、そんなところだろうと彼は思う。自分にはまだその資格がない。さっさとそうなってしまえばいいのにと思いながら、道端に昼間食べたばかりの菓子パンを吐いてしまふ。

学校のすぐ裏の下校路。すぐそばを彼の見知らぬ、だが同じ制服を着た生徒が顔をしかめて通りすぎていく。有也はまるで気にも留めずに、自分が吐いたばかりの、黄色いペーストになったメロンパンを見つめている。

何か辛いことでもあったのかと自分に問う。

彼はもうずっと長い間、物心ついた頃から学校に通い続けている。小学校一年から、中学二年の夏に至るまで、もう八年目になろうとしている。

普通は、八年も通っていれば、なんらかの慣れが生じる。吐かなければならないほどのストレスを感じるためには、日常にプラスしてなんらかのイレギュラーが必要だ。例えばいじめやしごき、失恋や喧嘩、罪悪感や孤独。ありえるだろう。学校という場所は、元来それほど平和ではない。未熟な人間が数百人も一つの敷地にすし詰めになっているのだから、トラブルが起らないなんてことは不可能だ。

だが、少なくともここ数年の間、中学に入ってからというもの、

伊吹有也は幸運だった。

いじめられているわけではない。孤独なわけでも、恋をしたわけでも、万引きがバレやしないかとびくびくしている雑魚というわけでもない。

ただ、学校に通っているだけなのに。

年々それが、辛くなる。

授業中や休み時間を問わず、言いようのない不安と倦怠に襲われる。勉強をしているとノートの上で字が躍る。友人と話せば相手の笑顔が不自然に歪んで見える。はしゃいでいると寒気がする。何か、ずっと頭の中に霧がかかっているような気がする。

昔はここまでじゃなかったんだと有也は思う。それはほんの、予感みたいなものだった。遠くからこちらを見ている、檻の向こうの動物のような倦怠感。ご飯を食べて眠ってしまったまえば直るような、その程度の、なんてことない【疲れ】のようなものだったはず。

そろそろ誤魔化しきれなくなってきた。自分にも、周りにも付き合いで入っていたいくつかの部活は全て辞めてしまった。放課後になつたらすぐに家に帰って、眠ってしまったないともたなかった。一日はとても短い。学校に行つて、家に帰って、眠る。食事は取れるときに取るが、無理して食べると吐き気でしばらく使い物にならなくなる。

有也は今日の昼食時のことを思い出す。珍しく、調子が良かったのだ。だから購買に行つて、メロンパンとお茶を一つずつ買つて、口の中に入れた。

調子が良かったのは間違いない。午後を乗り切り、冷や汗を流しながらもホームルームを耐えて、どうにか学校の外に出ることはできたのだ。

だが、そこまだった。

口をゆすぎたいと思つたが、学校の手洗い場まで戻つて、また帰

り道で自分の吐しゃ物を見つめるのかと思うとうんざりした。

少し歩いた先の自販機で、お茶を買った。コーヒーも牛乳も、もうずいぶんと前から飲んでいない。どちらも刺激が強すぎるからだ。口の中をゆすいで、飲み込むことなく、溝の中に吐き散らす。

まるで不良だと有也は思う。

マナーやモラルなんて、知ったことかと強く思う。そんなものは、バカが何の意味もなく唾を吐いているときにでも使う言葉だ。

半分残ったお茶をついでに溝に流し込んで、空になったペットボトルをゴミ箱に捨てる。ぼんやりとした頭で、数か月前に行った心療内科の記憶をぼんやりと反復する。

その内科は駅前から少し外れた、大きなマンションが立ち並ぶ通りの端にあるビルの、二階のテナントに入っている。

客は多くも少なくもない。店内は綺麗で明るく、モーターが流れている。

「自分の今の状態を一から十までで例えると、どれくらいですか」と医者と言った。

「今までで一番しんどいんです。一です」と有也は答えた。すると医者はそれをカルテに書いた。

虚しいやり取りだと有也は思った。俺はどうして親に言われるままにこんなところに来ているのだらうと。

ストレスが原因の神経性胃腸炎。

カルテに書かれてしまえば、そんな程度の病状だった。

「ストレッチャーがわからないんです」と、シンプルな黒い椅子に座らされた有也は言った。

「トラブルはないんです。今一緒に居る連中とは、うまくやれている。というより、向こうが気を使ってくれている。俺にはあまり、他人を思いやる余裕がないんですが。正直ありがたいと思っ

す」

「なるほど」と医者は頷く。三十ほどの、メガネをかけた目の細い男だった。どんな動物にも似ていない、さりとして人間みもない、とらえどころのない容姿をしていた。

「ストレッチャー……つまりあなたを苦しめる外部要因がないとあなたが認識しているのなら、その欠乏自体がストレスになっているということかもしれませんよ」

「え？」

「つまり、あなたはこう思っているわけですよ。自分がやってもらっていることを、相手にしてあげられていない」

「ええ……。もちろん相手によりけりですが」

「正直でよろしい」と医者は頷く。

「その罪悪感があなたを苦しめているとしたらどうでしょうか」

「……誰かの善意がストレッチャーということですか？」

「はい」

「そんな……そんなの、救いがないじゃないですか」
だがそれは正しいと有也は思った。

「そんなことはありません。救いしかありませんよ、伊吹くん」
「医者はカルテにナニカを書きながら続ける。」

「それが真実なのかもしれません。試してみる価値はありますよ」

「試す？」

「はい。つまり、方法は二つです。愚直に、できる範囲で恩を返し続けるか。知らんぷりを決め込むか」

「二つ……」

「はい。伊吹くん、あなたの思うように、社会は誰かと何かを【交換】することで成り立っています。モノとお金、犯罪と刑罰、成績とご褒美。病人と医者、男と女。一方的な関係に見えるものでも、必ず相互に作用している」

「……はい」

「そのような社会にあつては、交換できるものを持っていない、役に立たない人間は必要ないと思われています。あなたはそう思いま

すか？」

「……人によります」

「正直な人ですね」と医者も笑う。たいしておもしろくもなさそう
だ。

「あなたはそう思っている、私は思いますよ。だから自分が、与
えられたものを返せないことにいら立つんです。役に立たない自分
は、どうせならもっと苦しめばいいと思っている」

「自己暗示か何かかってこと？」有也の声が尖る。

「いいえ。社会的な暗示です」と医者は言う。

「例えばあなたのお母さんも、同じ暗示にかかっている。電話の向
こうでこう言っていましたよ。【息子の役に立たないことが悔しい
と
と」

「……」有也の表情から怒りが消える。しかし、消えてもなお、彼
の表情は苦痛にゆがんでいる。

「あなたが今のあなたであることは、べつにあなたの責任ではあり
ません。しかし、それでもあなたの人生はあなたのものですから、
誰かの善意に頼りたくなければ、あなた自身がなんとかするしか
ない。今日はあえて具体的なことは聞きません。それでも方法は二つ
提示することができます」医者はそこで言葉を切つて、有也の中に
言葉がしみこむのを待つ。

有也は眉をひそめて、じっとテーブルの上を見つめている。

「一つは微笑みながら【ありがとう】と伝えることです」

「……普通ですね」

「人間の気持ちというのは、けっこう貴重なものなんですよ」と医
者は笑う。「スマイルがゼロ円なんてとんでもない戯言です。あり
がとうと言うのは、互いが楽になるための方便です。礼儀は人を楽
にするためにある。学校でやらされる起立と礼は形骸化しています
から、ピンと来ないかもしれません」

有也は自分でもよくわからない寒気に襲われながら、釣られて笑
う。

「もう一つの方法は」と医者は言う。

「無視することです」

「無視、ですか」

「はい。善意というストレスを排除するためには、自分が何も報酬を与えられないということをし、周囲に理解させる必要があります。そうすれば、あなたに向けられる善意が極端に減ります」

「代わりに悪意が増えそうですね」と有也は言う。

「ええ、もちろん増えるでしょう」と医者は笑いもせず頷く。

「だから私としては、【ありがとう】をお勧めしますよ」

「……ええ」

「ただ、これだけは言っておきます。仮にあなたが何の役にも立たない人間だとしても、そんなことに罪悪感を覚える必要はないんです」

「……どうしてですか？」

「あなたの人生は、あなたのものだからです」

つまり、あの医者は、遠回しな言い方で。

俺は偽善のパラノイアだと言ったんだ。そう有也は思った。

それから一度も医者には頼っていない。

ただ眠るだけの日々。

それでも破綻が近づいてくる。

有也は、自分が一つ勘違いしていたことを思い知る。

たまたま周りに善意が溢れているから、それが苦痛だと思っただけ。

本当は、【それがなんであったところで】、苦痛に過ぎなかったのではなからうか。

ずっと空が落ちてくることを心配し続けているような、果てのない杞憂。妄想。全ての脳神経が接続されはいけないところに接続されているような、何かを見るたびになすりつけられていくような疲労。

ひょっとして、もう自分は、手遅れなのではないだろうか。

「どうして俺は」

言いかけて、また打ち消す。

一人で勝手に、空気を吸っただけで苦しんでいるんだと、絶望が心の中で育っていく。

疲れる。

疲れるべきではないところで。

使い切られる消しゴムみたいに、すり減ってしまう。

「あーっと、君さ」

自販機の後ろから声がした。有也は驚いて身をすくませる。

「だいじょぶなの？」

中性的な声。ただ若いということだけはわかる。

自販機の裏に、人？ おかしな話だ。自販機は路肩にあって、その向こうには転落防止のフェンスと、コンクリートで塗り固められた岸壁だけがある。下にはうっそうとした住宅地が広がっていて、その広がりの中には有也自身の家もあった。

有也が困惑していると、自販機の裏からゆっくりと人影が出てきた。フェンスの金網越しに、目が合う。ウェーブのかかった黒い長髪。細い眉毛、だが切れ長の目やうっすらと生えた無精ひげ。長身の立派な体格は男のものだった。カーディガン……ポンチョ。女が着るような薄手の布を羽織って、下は明るい色をしたデニム。鳶色のスニーカーを履いている。

なんだ？

そんなところから、飛び降り自殺をするつもりなのだろうか。

ビル四五階分ほどの高さがある。死のうと思えば死ぬる。

だが考えてもみなかった。

「なんで、そんなところに」と有也は呟くように言う。

「ん、ああ。心配した？」と男は無邪気に破顔した。

「僕はただフェンス抜きでここの景色が見たかっただけなんだけど。

そういうのって誰にも理解されないんだよね。困るよなあ」

男はそう言って頭を掻くと、軽快な動作でフェンスをよじ登り、乗り越えて有也の側に降り立った。

「有刺鉄線を張っていないのは、人道的だよな」と言った。

有也はもう、辛くなつた。さつさと逃げたくてたまらない。

「僕はね、公園のベンチに手すりをつけて、人を寝かせないようにする、みたいなやり口が嫌いなんだ。駅のホームには手すりをつけるべきだろうと思うけどな。用法の問題でさ」

「……」だが、男がずっと、脈絡なしに喋るものだから。タイミン
グを逸して、恐怖だけが募っていく。

「そうビビるなよ」と男は笑う。

「君のその根拠のない不安をなんとかしてあげようと思ってるんだからさ」

何を、言っているんだと有也は困惑した。

俺はそんなに、不安だ不安だと表情に出しているのか？

「正体がわからないから怖いんだ」と男は有也に歩み寄る。

「なんでもいいんだよ。チュシャ猫だろうと、アングルモアの大王だろうと。なんでもいいけれど、できうるなら【ありえそうにもない虚構】がいいね。君だつて周りの人間や、君とは関係なく生きている漠然とした他人のせいにはしたくないだろ。反抗期のトラブルは大概が想像力の欠如だ。かといって自分を勇者にする安直なファンタジーはよくない。つまり、そんなものは、寝言だからね」

「……」

有也に何かを言い返す気力はなかった。すっかり怖気づいてしまつていた。周りを見回しても助けてくれそうな人間はいない。生徒は何人か通るが、みんな見ないふりをして通りすぎていく。当然だ、俺でもそうすると彼は思った。

「つまりは、君は君のまま、ありえそうにもない、簡単に否定できる虚構を引き連れるということが、君にとつての最善の策なんだ。ひとりの詩人として歓迎しよう。君は【ただ現実を生きるべき存在

ではない】。君の魂が虚構を望んでいるんだよ」

男はいよいよ詰め寄って、有也の頭にポンと手を置く。

「さあお兄さんに自分語りをしてごらん。僕が見つくるってあげよう。料金は後払いでいいよ。僕はいわゆる信用商売というのが大好きなんだ。商売というのは、信用を取り扱ってこそだと思っただよ
ね」

邪気のない、微笑み。

善意。

有也はぞっとした。いよいよもって逃げられなかった。悪意ならともかく、善意に対して、俺は目をそむけられないと思った。

「あなたが、悪い人じゃないような気はしますけど」と有也は言った。

「俺には、人を説得できるような言葉なんてないんです」

「なら、君の寓意に聞こうか」

男はそう言って、でも、何をするともなく、ただ立っている。

有也は頭を振って男の手から逃れようとしたが、強い力でがっちりと掴まれて逃げられない。

俺が女だったらこの場で犯罪だぞと思いつながら、叫ぶタイミングを見計らう。

「なるほど」と言って、男は有也の頭から手を離れた。

「善悪と応報か。コミュニケーション志向だけど、ちょっと危ういね。素朴と言ってもいい。昔の騎士なんかにはこの手のが多かったと聞くよ。一途で、嫌われはしないんだけど、飼い殺されちゃうんだよなあ」

男は顎に手をやって脇を向きながら思索する。

有也はあまりのことに絶句した。

適当に言ってるだけなのか？

それとも、本当に俺の中から、何かを読みとったでも言っのか？

「なるだけ、君の寓意と関係ないものの方がいいんだよね。虚構化された自分と向き合うなんて勘弁だろ。ドン・キホーテと二人で一

直線に冥土へ向かうには、数百年も遅すぎるし」

「……あの、あなたは一体、さつきから、何の話をしてるんですか」「君の話に決まっているだろ」と男は真面目な顔つきで言った。

「道端でいきなり吐いたかと思えば、その場でぼんやり立ちつくしたり、半笑いになってる妙ちきりんな少年のことさ」

「ずっと見られていたのかと有也は驚く。

「あなた、何なんですか？」

「詩人だと言ったじゃないか」と男は両手を広げる。

「君が望むならフリーターだと答えよう。でもぼくは、そんなプロレタリアートの対義語みたいなものに縛られたくはないんだ。あまりに画一的でバカけていると思わないかい？」

「……」

「ま、中学生に訊いても反応はないね。さて、ぐだぐだ喋ってるうちに思いついちゃったよ。君を楽にできる虚構の形」

男はそう言っつて右手を持ち上げ、五指を開いて掌を上に向ける。

まるで、その中に何かを持っているとも言いたげに。

「受け取るか？」

「……いいえ」

「ならあげよう」と男は言っつて、有也の顔面をアイアンクローで握りこんだ。

「これは善意じゃない。僕は君を、いや、誰であろうと、虚構の世界へ引きずり込みたいのさ」

立ち尽くしていた有也が正気に戻ったときにはもう、男の姿は消えていた。

傍らには、燃えるキリンが立っていた。

でかい。

2 キリンの進化について

2

キリンは高かった。四階建ての校舎を上から見下ろすほどだ。細く見える脚も、近づいてみると人間の銅ほどもある。黄土色の毛並みに、やけどの跡みたいなきげた模様がついている。有也はもしこれらの斑点がもっと小さかったらと想像し、ぞつとする。皮膚病みたいに、ただれているような、腐った枯れ草のような斑点だ。

そしてタテガミは燃えている。太陽の表面みたいなプロミネンス現象が起こっている。千度の炎の気配が遠くから漂ってきて、時々ま火の粉が下まで届く。物理的に存在しないものに、やけどさせられるなんてことがあるだろうか。有也はまだ、手を付けていない。

キリンはいつも首をピンと伸ばして立っている。目は妙に白目が多い。動物よりも人間に近い目だった。口は一切動かさない。何も食べない、何も出さない。ただじつと立っていて、俺が移動するとゆっくりとした足取りで付いてくる。

誰もキリンに注意を向けることがない。知らずに頭を踏みつぶされているその時でさえ、だ。

建物を貫通し、いつも有也の傍に立つ。教室にいる間、彼にはキリンの脚しか見えない。太い一本の木が、いくつかの机ごと、人間を貫通し、ピクリとも動じない。

有也は、視界に表れ続けるキリンの脚を無視することができなかった。それは信号機の赤色だけを無視して歩いて行けと言うようなものだ。

楽になるどころか、と彼は思った。

不安で仕方がない。

正気と狂気の境界線は、こんなにも細く、破けやすい、綿のようなものだったのだろうか。

あの詩人は実在していた人間だったのだろうか。
そしてこのキリンは、自分にしか見えないのだろうか。

有也はますます衰弱していった。目に見えてやせ細り、外に出ることもおっくうになった。自分の部屋で、あるいは教室で。ずっと呼吸に集中している。体育の時間は地獄だった。グラウンドでは、凜と立つキリンが彼を待つ。否、キリンは、彼を無視して、一匹、じっと空を見ている。

そこへ帰りたいたいとも言おうように。

建物を貫通する幽玄の体を持つていくせに、蹄の先だけは、コトンと地面に置いたまま。

「キリン？」

クラスメイトの先島修司は鼻で笑った。

鼻で笑うだろうと思って、有也は彼に話したのだ。不満はなかった。

「普通、美少女とかじゃねーの。キリンに欲情してんのか？」

「まさか」

「どんなキリンなんだ。モンハンのキリンか？ それとも、動物園のキリンか？」

有也はモンスターハンターをやったことがなかったが、どうやら伝説上の麒麟か、ジラフの日本語訳かを聞いているらしいと当たりを付けた。

「動物園のだよ」

「じゃあ英雄願望つばいのもないんだな。意味がわからん」と修司は匙を投げた。

「お前、変な本でも読んだんじゃないの。ラノベ読んで頭悪くなれよ。黒い騎士だの吸血鬼だの、最悪麒麟の娘でもいいや。そしたら世間が中二でまとめて、それなりの対応をしてくれるよ」

有也から見れば、修司は不思議な奴だった。学校の部活には入ら

ず、ボクシングのジムに通い、休み時間には常に誰かと語らい、ゲームやネット動画の話しかしない。そのくせ好きな本は「岩窟王」と「そして誰もいなくなった」。復讐とサバイバル。明るいのには、暗い。快活なのに、皮肉屋でもある。有也は彼のアバウトな活力を羨ましく思い、一方で軽蔑している。たぶんまだ彼は、健康ゆえに自分を突き詰めたことがないのだろうと。

「中二？」

「ああ……そういうお前、携帯もパソコンも持ってないんだっけ」
有也は頷く。親も持たせたがらなかったし、有也も必要だと思わなかった。常に人と繋がっているなんて、きつとわずらわしくなってしまうと、自分を信用していなかった。

「中二って言うのは、ネットスラング。中学二年生の頃に考えそうなこと全般。ブラックコーヒー、洋楽、不良マンガ、妄想、美少女、隠された力、魔法、超能力、つまるところ、アナーキーな、自分に都合のいい、フィクション」

「アナーキー……？」

「無秩序ってこと」

それもネットスラングなのだろうかと有也は思った。

「でも、ただのキリンってお前」と言っつて、修司は笑った。

「それ、なんか意味あるのか？」

「……意味、は、たぶんない」

有也は修司の無邪気な笑顔を辛く思った。圧力を感じる。修司の知識や努力に気圧されてしまう。ささやかな周囲への、有也への軽蔑が見え隠れする。友達というわけではないのだと、有也は思う。

同じクラスで、話を通じる人間が、少ないのだ。

修司と話するときには、少なくとも意志の疎通で苦しむことはない
と有也は思う。それは彼にとって、いつでもすごく新鮮で、決して
慣れない負担でもあった。

誰かと会話をするということが。

「意味があるんだよ、普通」と修司は言う。

「名誉心、恋愛願望、もつと単純な工口い欲情。泣きたいときもあり、笑い転げたいときもある。学校は退屈でム力つくから、紛らわせるんだよ」

「……本を読むのと同じ？」

「だいたい一緒。タダか金かかるかの違いだけ。あと、他人の妄想ならボロクソ言えるけど、自分の妄想は後で思いだして死にたくなったりする」

「……よく、わからない」

「まっとうな奴。ってかお前の場合余裕がないのか。なんでそんなに毎日が苦痛なわけ？　　って、そうか」と修司は手を打ち合わせる。

「つまりお前、ずっとキリンが見えてて、発狂しそうなんだな」

有也は苦笑し、そういうことにしてしまいたいなと思った。

「……いや、順序が」

「順序？」

「キリンは……後なんだ」

有也は詩人とのいきさつを修司に話した。

キリンが燃えていること。まださわってみたこともないこと。何処に行ってもついてくること。今もそこに脚が見えていることを。

修司の顔から笑みが消えた。心配されているのかと、有也は残念に思った。

「今も、そこにいるのか？」と、修司は教室中を人差し指でくるくる回す

「いるというより、ある。キリンの脚が」

「さわってみろよ」と修司は腕を組んだ。

「お前、やっぱり中二なんじゃないの？」

「どつでもいいよ」

実際、俺は中学二年生だと有也は思った。

このどうでもいいやりとりが、まだ俺のふれたことがない電子の世界でどれぐらい繰り返されているのだろうと思うと、うんざりし

た。

「ここは二階。ちょうどキリンの膝関節のこぶが教室を貫通している高さだった。」

「こぶはちょうど、たむろっている女子グループの中心を貫いて、彼女たちの半身にめりこんでいる。」

「……後にするよ」

「ふうん、まあいいけど」と修司は言った。

「もうすぐチャイム鳴るし。でもお前さ、べつに中二な妄想に浸ろうと勝手だと思っただけど、それで苦しむのってなんか違うだろ。」

自分で自分を苦しめてるだけじゃんか。遠回しなりストカット……ってそれも中二っぽいけど」

「中二は、得する妄想って意味だけじゃないの？」

「……うーん、とりあえず、相手の妄想を否定したいときに使う言葉かな」と修司はあっさりひるがえした。

「まあいいんじゃないの。ここでキリンが燃えてるとしたら、俺はなんだか愉快だし」

「見えてないからそんなことが言えるんだと有也は思ったが、言いかえす気力はなかった。」

ああ、それにしても幸運だ。

手近に話を通じる人間がいるなんて。

日々をなんとかこなしていくうちに、有也は少しずつキリンの存在に慣れていった。ただ立ってるだけのだけの棒。踏みつけてくるどころか、お互いに、皮膚を合わせることにすらしない。

有也の臆病は徹底していた。

帰り道に、必ず自販機の裏を確認して、詩人が隠れていないかと疑いながら。それ以上の行動は何一つとしてしなかった。

そしてキリンもそんな彼を静観しているだけで、ただ毅然と立ち続けるだけだ。

有也は夜が来るたびに、部屋の中央を柱のように突き刺している脚を見つめて、キリンが立ったまま眠れることを思い出す。

なんて悲しい種族だろうと思う。

どうしてそこまで、脚と首を長くする必要があったのだろうか。

わざわざ高いところの葉っぱを食べるためだけに立ったまま眠るなんて、ありえないと有也は思った。

脚と首を長くするなんて。生存競争として間違っていないか？

なんでそんなに、種族単位で同じ葉っぱに固執したのだろう。

そしてある夜、有也は一つの仮説を思いついた。

キリンがいつも鋭い目で空を見つめているのは、食べられるような木を探しているということじゃないか？

餌。お腹を空かせているのだ。

有也はさらに推測を続ける。理由はわからないが、キリンは有也のいる場所になら何処にでもついてくる。逆に言うなら、有也のいる場所にしかない。

餌を見つけたところで、食べに行けないのでは、遠くから眺めるしか手立てはない。

「そうなの？」と、有也は小さな声で尋ねる。

しかし、キリンは脚をぴくりと動かすこともせず、返ってきたのは沈黙だった。

3 サンドスフィア

3

キリンを引きつれるためだけに街を歩くという行為を実行するまでに、数日かかった。次第にそのことばかり考えるようになって、気が狂いそうになり、実行に移さざるを得なくなったのだ。コストを下げるために下校途中に行くことにした。何処にでも、キリンの向いている方向へ。ぎりぎり帰れるところまで。遠くて近い、自分を閉じ込める鉄のない檻の中を、有也はキリンの首が向いている方に歩いていく。

ところが、どこにも辿りつかない。キリンは見上げるたびに違う方向を向いていた。なにせ尋常じゃなく首が高いので、ずっと見上げ続けながら歩くなんてことはできない。それで、視線を逸らして周囲の道を確認する。再び視線を戻したときには、キリンはもう、別の方向を向いている。

二十分ほど粘って、有也はようやく悟った。

このキリンは俺を何処へも連れて行かないんだ。
ただそこにいるだけなんだ。

君に関係のないものがないと、たしか詩人は言っていた。つまりは、そういうことだ。向こうは俺のことなんて気にも留めていない。キリンから見れば、俺はアリだ。小さいから無視できるんだ。俺がただ大きいというだけでキリンを無視できないのと同じように。

疲れ切った有也はどうにかこうにか公園に辿りついて、水飲み場で喉をうるおした後、すぐそばのベンチに座った。人はいないが、隣のグラウンドでは子供たちが遊んでいる。

キリンは公園を囲む木々よりも高く、一步も動かずに立っている。その木を食えと有也は思った。食べてくれよお願いだから。そうしたら、この意味のない歩行が、ちよつとは報われる気がするから。だがキリンは、自分よりも低い木々を歯牙にもかけなかった。有也はベンチにへたり込んで、そのまま、知らず知らずのうちに眠ってしまった。

目が覚めたときには夜になっていた。

暗闇の中にそびえたつキリンを見て、有也は夢の続きを疑った。だがそれまで見ていた夢ははじけとんでしまった。

夜はたいてい部屋の中に居る。キリンの脚から上を見るのは初めてだった。

不気味な、斑点の、連続。

血走って浮き出た静脈のような模様がキリンの前身をうすらぼんやりと浮かび上がらせている。目は一切の光りなくくぼみ、角の輪郭が星を隠すことがなければ、大きすぎて見えもしないだろうと有也は思う。

燃えるタテガミ。

ゆらゆらと、塵気楼のような歪みに次々と昆虫たちが飛びこんでは、すり抜けて行く。

ただの一匹も、死なない灯り。

苦しめない光り。

フイイイイ。

フウウウウ。

静かで、深い、息。生きているものが放つ気配が有也から心を奪う。

なんでこんなものを。

あの訳のわからない詩人は、俺にひつつけたのだろう。

元に戻して貰えるとは思わなかった。また会える保証もない。探し抜くような精神力も技術も、金銭もない。会えたところで、説得

するための言葉すら欠けている。

よくわからない。

この無害なキリンが、なんでこんなにも怖いのだろう。

「こんにちは」

不意に女性の声が出て、有也は周りを見まわした。可愛らしい、電話口の作り声のような、トーンの高さが耳に残る。

人影はない。遊んでいた子供たちは、いつの間にか帰ってしまった。俺も警察が来る前に帰らなければと、世間的なことを考える自分をおかしく思った。

「こつちだよ」

見上げると、月をバックにキリンが下を向いていた。滑らかな輪郭、穏やかな目。下品な口に、長い舌。

「……お前、女、だったんだ」

有也は、キリンが初めて話しかけてきてくれたことを嬉しく思った。

「違うよ」

今度は、背後から声がする。

振り向くと、小さな、発光した砂粒の流れのようなものが、すいすいスピードで、そのくせ無音で回転していた。

砂の球。サンドスフィア

「こんにちは」

どうやら女性の声は、その球の中心から聞こえてくるようだった。

「あ、そっか。この場所では今の状態を夜と呼ぶんだよね。じゃあ、こんばんは？」

「……」

有也は何かを言おうとして、何も言葉にならなかった。

ゆっくりと後ずさって、キリンの脚の傍にいく。

「逃げなくてもいいのに」

「……何？」

「あなたこそ、ふふふ」

サンドスフィアは小さく笑ってこう言った。

「そのキリンがね、突き抜けてるの」

「……突き抜ける？」

「感覚器官の壁」とサンドスフィアは言った。「目や耳のことね」

「……何のこと？」

有也の混乱は頂点に達した。

何を言われているのか、さっぱりわからなかった。

「きみにも見えるしぼくにも見える。これはけっこう、すごいことだよ。キリンがぼくたちを支えているんだね」

サンドスフィアの回転が変わり、楯円が広がり、ラグビーボールのような形状になった。

「世界は象と亀に支えられているというのがこの世界のかつての定説だったんでしよう？ どうしてわからないのかなあ。言葉を通じて自同一認識を拡大できるんだよね？ リンクをさぼってる？ それは賛成しないよ。誰にも続かないなんて生きてる意味がないじゃない」

「……」

「生きてる意味に意味なんかないって顔だね」

「そんな顔してないよ」

有也の口からようやく言葉が飛び出した。

「きみ、キリンが何か知ってるの？ こいつどうやってたら消えるか教えてくれない？」

「きみが消えた方が速いよ」とサンドスフィアは言った。

「きみが死ねば、それで助かるから。あんまり深く考えないように。たぶん、こんなレアな《無限の住人》に出会うことなんて、これから何度捉えられたところで一度もないだろうから」

「無限の……住人？」

「燃えるキリンは永遠だ」と言つて、サンドスフィアは粒子を揃えて一列の線になり、姿を消した。

「いずれまた。もう少し見ていたいから、死なないで頑張つてね。というか、きみが死のうとしたら邪魔するからね」

「……意味が！」と有也は叫んだ。

「意味がさっぱり、わからないんだ！」

「そうかな」

そう言つて、サンドスフィアは限りなく細い線となり、有也の視界から消えてしまった。

有也は泣きながら通りを歩いて、家に帰った。

キリンは相変わらず、我関せずと、立派な四本の脚をスツと伸ばして遠くを見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1495p/>

キリンが燃えている

2010年12月18日21時55分発行